# 第五章　アイヌ文化期

## 第一節　竪穴式住居からチセ

### 竪穴式住居

北海道における住居の形態として一般的に擦文時代までは竪穴式住居が主流であり、その後のアイヌ文化成立の過程の中で平地式住居に変化していったと考えられている。

アイヌ文化の母体である擦文文化の竪穴式住居の基本的な形態は、本州の古墳時代から平安時代の竪穴式住居の影響を強く受けたものである。壁構造や上屋構造については不明な点が多いが、方形に掘られた竪穴であること、壁に煙道の付いたカマドを設けた点などが共通している。カマドを設けた壁が本州では北側や西側に多いが、北海道では南側や東側の壁が多いこと、床の中央に炉が設けられたこと、屋根が土によって葺かれていたことなどが異なる点として挙げられる。

カマドの位置の移動は、上屋構造と煙道との関係の中で、冬季間の北風に対処した結果とも考えられるが、アイヌ文化の火に対する信仰と太陽の出入りと深く結びついている東側を神聖視する方位観が擦文時代に萌芽していたとの指摘もある（宇田川二〇〇〇）。床中央の炉は、暖を取るために欠くことができず、土葺きの屋根は北海道の冬季間の厳しい寒気を遮断する方法として擦文時代以前から用いられた上屋構造の一つであり、市内の縄文時代の竪穴式住居跡でも確認されている。なお、土葺の竪穴式住居は、火山灰に埋もれた古代の村として有名な六世紀後半の群馬県の黒井峰遺跡からも見つかっており、北海道固有のものではない。

千歳では、丸子山遺跡で調査された八世紀前半の擦文時代初頭の竪穴住居跡のカマドが北側に設けられており、擦文時代の当初は伝播してきたカマドの位置をそのまま受け入れていたと思われるが、床中央には既に炉が設けられており、新たな竪穴式住居の形態を受け入れていく中で、北海道固有の文化や自然に親和していったと推測される。

市内の末広遺跡ではカマドを設けた竪穴式住居のほかに、カマドがなく床に炉のみがあり、主柱穴がない比較的掘り込みの浅い竪穴式住居が並存する。この掘り込みの浅い竪穴式住居が造られた目的は明らかではないが、カマドを設けた竪穴式住居に比べ、屋根が土葺きではなくヨシ葺であるように構造的には軽易であったと思われる。このような住居は、後のアイヌ文化の平地式住居であるチセの母体を担った竪穴式住居であった可能性がある。アイヌ文化のチセの建築において地上で屋根を単独に作り、立てた柱の上にその屋根をのせて建てる方法がある。想像をたくましくすれば、この建て方こそが擦文時代の主柱がない浅い竪穴を覆っていた屋根の作り方を受け継いだ工法なのかもしれない。

千歳には、当時の竪穴式住居跡が地表面にくぼ地として数多く残されており、観察することも可能である。大規模な竪穴群は、千歳川上流にある独立行政法人水産総合研究センターさけますセンター千歳事業所（旧サケマスふ化場）近くの千歳川右岸低位河岸段丘上にあるウサクマイC遺跡である。測量調査の結果、七五個のくぼみが確認されており、道央部で現存する最大の竪穴群である。また、市内の発掘調査によって調査された竪穴式住居跡も多数にのぼる。擦文時代の平地式建物としては、丸子山遺跡でアイヌ文化の高床式倉庫（プ）と同様の柱穴の配置を持つ建物跡を確認している。なお、擦文文化の住居については、本章第二節第四項を参照願いたい。

### アイヌ文化のチセ

「チセ」とはアイヌ語で「家」のことであり、単に「チセ」というとき

は平地式住居を指す。そのほかの場合は、「チセ」の前に説明語を冠する。例えば「トイチセ」（土－家・竪穴式住居）、「シラッチセ」（岩－家：岩陰や洞窟状で寝泊りできるところ）などさまざまなチセがある。

市内の発掘調査により、末広遺跡やユカンボシC2遺跡、オサツ2遺跡、チプニー2遺跡などで、樽前ａ火山灰（一七三九年降下）の下から多数のチセ跡が発見されている。その特徴は、図5－1に示すように、壁となる位置に掘立柱を並べた平地式住居で、屋内に屋根を支える柱が無い。チセの平面形は、長方形が多く、長軸の一方に「セム」と呼ばれる玄関と物置を兼ねた張り出し部分が付くこともある。チセの規模は大小さまざまであるが、セムを除き短辺が四～六メートル、長辺が五～一〇メートルほどである。図5－2は平取町で復元されたチセであるが、そのレイアウトは三〇〇年の時の経過を感じないほど相似性が高い（萱野一九七八）。

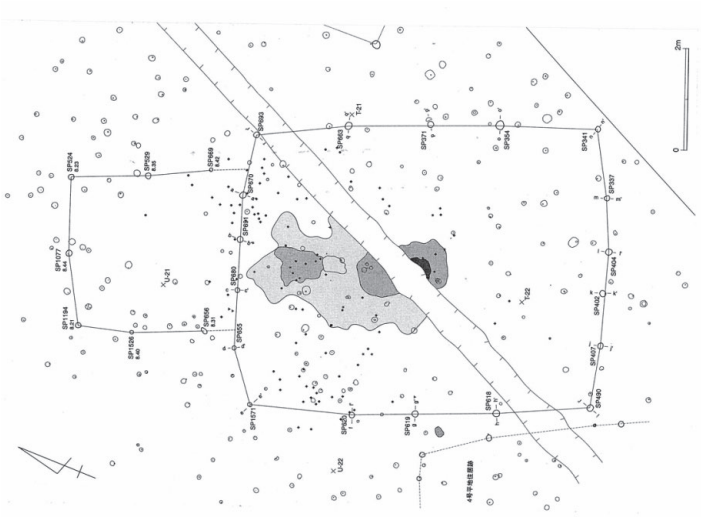

図５－１　樽前ａ火山灰の下から見つかったチセ跡（オサツ２遺跡）

屋根を支える柱の太さは、柱穴から推察すると一〇～一五センチほどである。柱穴の断面形状から基部先端が尖った柱が多用されている。このことは、伝承されているチセの建築方法と良く一致する。伝承によればチセの柱は、地盤の良好なところでは、柱の先を尖らせ、焦がして穴に入れる。そうすると屋根などの自重によりしっかりと地中に食い込み動かなくなる。反対に地盤の柔らかいところでは、先端を平らにし、地中に深く入らないようにしたとのことである。近年の発掘調査報告において、チセの柱穴の断面形で柱の基部先端が尖っていることを確認した場合、「打ち込み柱」などと表現する例を見ることがあるが、小林（二〇〇〇）が既に指摘しているように柱を打ち込む作業は、チセ特有の柱上端のサス状形状などから困難である。打ち込む作業を連想させる表記は伝承から見ても不適切であろう。

チセの床の中央からセム側にかけて必ず炉が設けられている。発掘調査では、焼けて赤くなった土（焼土）により炉の存在が確認される。焼土の上に白い灰が残されている場合もある。時にこの炉跡から、炉の熱によっ

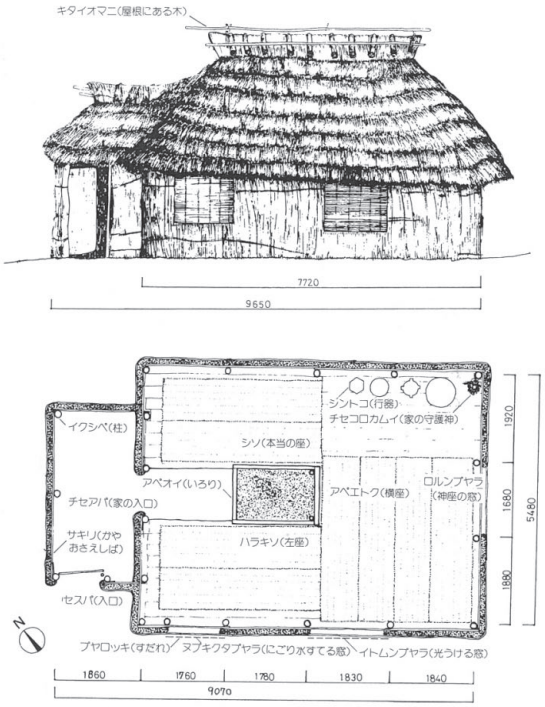


図５－２　復元されたチセ
（出典：萱野茂『アイヌの民具』1978年）

て炭化した植物の種子が発見される。サルナシ・キハダ・ヤマブドウ・ヤマグワ・ヒシなどの野生植物、アワ・ヒエ・キビ・イネ・アズキ・アサなどの栽培植物である。これらの種子は、アイヌ文化における植物食や雑穀類の利用、栽培（農耕）、交易などを考える上で大切な手がかりとなるものである。では、これらの種子類はなぜ、炉跡から見つかるのであろうか。炉は暖を取るほかに、調理の場でもある。食材がこぼれたと考えるのはごく自然であるが、アイヌ文化の信仰と炉の関わりを考えると別な見方ができる。アイヌの人々にとって炉は、「アペフチカムイ」という名の神がいる神聖なところである。この神は人間に最も近い場所にいて、他の神への仲立ちもしてくれる大切な神である。炉の炭や薪がはじける音は、この神の言葉だという。アイヌの人々は日々の生活の中で、また、生活の節目でさまざまな出来事についてまず炉の火の中に食物を供え「アペフチカムイ」に報告する。そして感謝し、謝罪し、お願いするのである。

発掘調査によって炉跡からは、炭化した種子類のほかに焼けた魚骨片や鹿などの獣骨片なども多数見つかっており、これらは種子類と同様に「アペフチカムイ」への供物の一部と考えられる。

今日伝えられているチセの窓には、「ロルンプヤㇲ」（神窓）と呼ばれる神々が出入りする窓があり、千歳の場合は東側（日の出る方向）の壁に設けられていたという（松居一九九三）。他の地域では川上に神窓を向けてチセを建てる例が報告されている。発掘調査においては地中に残された柱や炉の跡しか確認できないが、民族調査例では神窓は、チセ出入り口と反対側の壁に設けられており、チセの長軸線上にあることが知られている。そこで市内で発掘されたチセ跡の長軸方向や炉、セムなどの位置関係を頼りに神窓の方向を推測していくと、やはり東から南側になるようである。千歳では、およそ三〇〇年前から日の出る方向に神窓を設けたチセが建てられていたことになる。

地域によって相違のある神窓の方位であるが、千歳では日が出る東側を強く意識する方位観がある。アイヌ文化の極めて保守的な習俗である葬制において、埋葬頭位を決定するうえで日が入る西側方位が北海道全体に共通する意識として認識されている。このことは、日の出入りに伴う方位観が古い段階で共有化されていた価値観である可能性が高く、神窓の方位がチセによって異なる場合には、神窓が川上を向くチセより東に向くチセの方が古いと判断できる材料になるかも知れない。

チセの屋根や壁は、「キ」（ヨシ）によって葺かれるのが一般的である。ヨシは河岸の湿地帯を好むイネ科の植物で、千歳では大低湿地であった旧長都沼に繁茂し、長都沼は千歳の代表的なヨシの供給地であったという。ヨシはストロー状の構造で空気をたくさん溜め込み、幾層にも重ねることにより大変高い断熱効果を得ることができる。また、チセの内壁や床に敷くゴザは、「シキナ」（ガマ）の葉で編まれている。ガマの葉はスポンジ状の構造を持ち、ヨシ同様にたくさんの空気を含んでおり、断熱性が高い素材である。一見頼りなく見えるチセは、断熱効果の高い自然の素材をたくみに利用した北海道生まれの優れた寒冷地仕様の住居であった。

## 第二節　墓

### 第一項　和　人

「アイヌ」や「和人」という用語は、ともに政治的・文化的な背景や形質などの、いわば「人」の属性を総じて表現しているが、時代によってその実体が異なっていたことを認識していなければならない。

特に「和人」という用語は、「アイヌ」に対比するものとして様々な分野で用いられてきた。この「和人」という言葉の定義を明快に示すことは難しいが、主に本州に住居し本州に展開した中近世の文化や政治・経済体制を源泉とする価値観を共有した人々の総称といえる。

対して「アイヌ」とは北海道を中心に居住し、アイヌ文化を担った人々が自ら称した「人間」という意味の呼称である。アイヌは、アイヌ以外の人々を和人も含めてシサム（隣人の意味を持つアイヌ語）と称した。

本州域から北海道への進出は先史時代からみられるが、古代には青森県十三湊を拠点とし日本海沿岸を往来する交易が活発に行われていた。一五世紀頃には渡島半島南端部に土塁や壕をめぐらせた一二の居館が築かれ、館主の多くは、東北での戦で南部氏に敗れた奥州豪族であったとされる。これら居館のひとつである上ノ国町の勝山館跡の発掘調査によれば、軍事的な拠点のほかに交易の拠点として果たした役割を示す鉄器や陶磁器類など、多くの遺物が出土している。また、アイヌと和人の墓が同じ墓域内で発見されており、当時の両者の関係を示唆する事例として注目される（上ノ国町教委二〇〇一）。

康正三（一四五七）年、コシャマインに率いられたアイヌが蜂起し、館を次々と攻め落とすが、翌々年にコシャマインが倒される。その後、戦乱はしばらく続くが、その期に乗じて蠣崎氏が館主を配下に置き道南部での支配権を確立した。蠣崎氏は慶長四（一五九九）年に松前と改姓し、慶長九年には徳川家康からアイヌとの交易権独占を許可する黒印状を与えられた。道南部における和人地はしだいに拡大していく。また、出土遺物などから道内各地の海岸部や千歳のような河川沿い内陸部まで和人が進出し交易活動していたことが裏付けられている。市内においても末広遺跡で近世初頭の同時代に生きていたアイヌと和人の墓が同じ墓域の中で発見されている。

### 第二項　墓

千歳川流域での発掘調査によって、近世アイヌ文化の葬制の研究が進み葬制に伴う習俗が明らかになってきた。主な内容は次のとおりである。

（一）　墓は地面に穴を掘ってつくる土壙墓である。被埋葬者は一人であるが、合葬の場合も少数ながらみられる。

（二）　墓穴の主な形は、楕円形、足元が狭く頭部側が広い長台形である。この内、長台形が全体の六〇㌫を占める。盛土やその周囲に掘削跡が溝状に残る例や、竪穴や墓標跡の柱穴を伴う場合もある。

（三）　墓穴の大きさは、長さが一・五～二㍍、幅〇・四～〇・六㍍、深さは平均で〇・四㍍である。

（四）　埋葬姿勢は、仰向けで身体を伸ばした仰臥伸展葬が基本であるが、稀に伏臥伸展葬がある。

（五）　埋葬するときの頭の方向は日の出る方向である東から南東に向く。アイヌ語で「ポクナシリ」と呼ばれる死者の国は日の沈む西方にあり、頭を日の出る方向に向けるのは、死者がポクナシリに旅立つために起き上がったときに西方に向くようにするためという。ちなみに伏臥伸展葬の埋葬頭位は西方であり、やはり立ち上がった時に西方に向く。

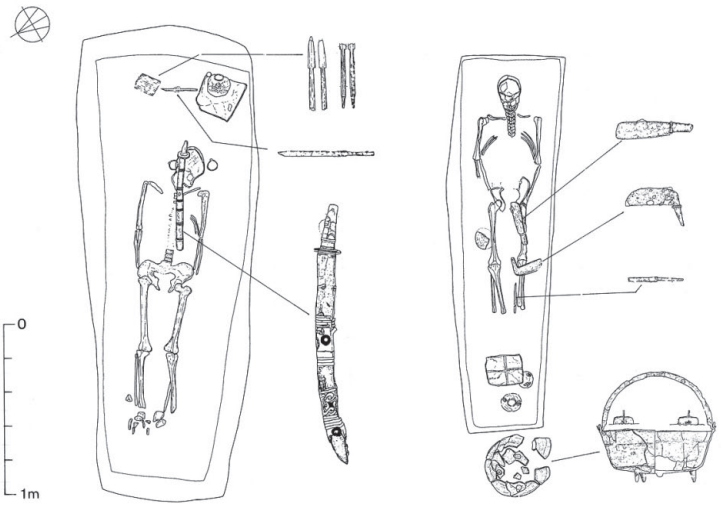


図５－３　近世アイヌの墓（右：女性墓、左：男性墓※ともに末広遺跡）

（六）遺骸とともに埋葬される副葬品に男女の違いがある。男は太刀などの武具や矢骨などの狩猟具、女は鉄鍋などの生活用具や鎌・鉈などの採集用具が副葬されるほか、刀子や漆器、喫煙具、装身具などは男女が共有する副葬品である。

（七）副葬品が置かれる位置に男女の違いがある。墓穴の内外で大まかに見ると上半身側が男性副葬空間、下半身側を女性副葬空間とすることができる。男の太刀や女の鉄鍋などが典型的な例である。

以上が千歳地方の近世アイヌ文化の葬制であるが、これらは二〇世紀前葉の日高地方沙流川流域での民族学的調査の事例と一致する点が多い。また、他地域での発掘調査事例においても埋葬頭位など共通点が多い。

## 第三節　チャシコツ

「チャシ」はアイヌ語であり、一般的にアイヌが造営した砦を示す。それ以外に館・柵・柵囲いの意味がある。ユカラの中では、登場人物が住んでいる大きな家として描かれている場合もある（中川裕一九九五）。また、見張り場や聖地、談判の場などの伝承がある。「コツ」はくぼ地を表し跡の意味を持つ。

造られた年代は、発掘調査で明らかになったチャシを覆う火山灰の年代から、一六～一八世紀と想定されている。発生過程などの解明は進んでいないが、他民族との対立などアイヌ社会を取り巻く社会情勢の変化と連動して造られてきた施設であると考えられている。

チャシの主な構造は、壕と土塁及びそれらに区画された郭部分からなる。他地域の発掘調査によると、壕の内外から柵列の痕跡と思われる柱穴の列が発見されておりアイヌ語のもつ意味とよく符合している。

造られた場所の多くは、川などに面した小高い崖や突き出た台地の先端部、孤立した山や丘の上などである。河野広道は立地した地形の特長により次の四つの形態に分類している（河野一九五八）。

**丘先式**　岬や丘の一端を弧状の壕をもって区切ったチャシ。

**面崖式**　崖に面する台地の一部に半円形または四角形の壕を周らしたチャシ。

**丘頂式**　小丘の頂部に周濠を周らしたお供え餅形のチャシ。

**孤島式**　湖中や湿地中に孤立している丘や島等をそのまま砦として利用したチャシ。

現在、市内でチャシと称される遺跡は、千歳川本流沿いに五ヵ所と嶮淵川沿いに一ヵ所がある。ほかに長都川流域と旧長都沼周辺部に三ヵ所ある

が、規模や立地などから一般的なチャシとは異なる遺跡の可能性がある。

**フレドイヒのチャシ**

本町三丁目の千歳神社の拝殿附近にある。ママチ川と千歳川に挟まれた標高二五㍍の高位段丘の東端にあたる。千歳川右岸の幅五〇㍍、長さ一〇〇㍍ほどの舌状に延びた丘陵部先端に横断する二条の弧状の壕があったが、現在は大部分が埋められている。河野分類の丘先式に該当する。この地点に立つと、千歳川下流の低地部（現市街地）が一望でき、千歳川上流に目を転じれば二㌔先の対岸にアッテウシのチャシを視認することができる。なお、「フレドイヒ」とはアイヌ語の「フルトエ（丘がそこで切れた所）」が語源との説がある（『市史』・『増補』）。

**アッテウシのチャシ**

千歳川左岸の標高四〇㍍前後の高位段丘上にあり、千歳川に向かってやや突き出た崖に接して立地する。河野分類の面崖式に該当する。その規模は、外周径で約六〇㍍、幅約五㍍の半円形の三条の壕があり、壕の掘り土を壕の外側に盛り土塁を形成している。昭和三十八（一九六三）年に一部が発掘調査され、壕の断面形がV字形であること、元文四（一七三九）年に噴出した樽前ａ火山灰に覆われていることが確認されている（写真５－１）。

写真５－１　アッテウシのチャシ

このチャシは、ランコシコタンの中心にあり、コタンのみならず千歳アイヌ全体から尊敬されていたという（名取一九四九）。「アッテウシ」はアイヌ語の「アッウシ（オヒョウニレの木が多いところ）」という地名が語源で、現在の桂木三丁目から六丁目にかけての道央自動車高架附近であると推測されている（長見一九七六）。古くは元禄十三（一七〇〇）年の調べといわれる古文書『松前家臣支配所持名前』にシコツの鳥屋として「志古津ノ厚伊志」がある。また、シコツ十六場所の一つに「アツ石」が登場する。この後、文化五（一八〇八）年から四年間の場所の様子を記した『蝦夷竊々夜話』によると千歳に四ヵ所の出張番屋を置き、それぞれに場所を取りまとめた。その一ヵ所にロウサンがありアツイシが含まれている。ロウサンという地名は、千歳神社附近の地名との推測が（長見義三『ちとせ地名散歩』）、妥当であればアツイシが千歳川筋にあっても違和感はない。

**ペサのチャシ**

アッテウシのチャシから二㌔上流の千歳市水道局蘭越浄水場対岸に位置する。千歳川に突き出た丘陵部の標高約六〇㍍の頂部を巡る壕が確認されており、河野分類の丘頂式に該当する。ただし、壕は全体的に明瞭ではない。ここからは下流のアッテウシのチャシが見通せる。ペサとは湿地内にあって夏になるとクマやシカがそこに入ってきてのたうちまわる場所という意味のアイヌ語である（知里一九五六）。安政四（一八五七）年にこのあたりを踏査した松浦武四郎の日誌には、ペサのチャシが寛文の乱の際のオニビシの居所だったという逸話が記されている（松浦「由宇発利日誌」）。

このチャシのほかに千歳川上流にはシュトクンネのチャシ（壕を確認）があり、紋別川と千歳川の合流点にはモンベツのチャシ（壕が未確認）があるといわれている。また、泉郷地区の嶮淵川右岸にある泉郷神社境内にはケネフチのチャシがあったが、現在は壕のごく一部が残るのみである。市内のチャシは元文四（一七三九）年に噴出した樽前ａ火山灰に覆われて

おり、市内のチャシの造営が元文四年以前であることは確実である。

**釜加のチャシ**

旧長都沼や千歳川に面した標高一〇㍍前後の低地の微高地に立地し、千歳川上流域のチャシの立地や規模と際立った違いがある。幅三～五㍍、深さ一㍍ほど、長軸六〇㍍・短軸二〇㍍ほどの範囲に双楕円状の溝が巡る。昭和四〇（一九六五）年に部分的な発掘が行われ、一七世紀後半の備前系片口や内耳鉄鍋（二耳三足）、鉄斧が出土し、他のチャシ同様に樽前ａ火山灰に覆われている。焼土（炉跡）や柱穴なども発見されていること、古くから地元では「アイヌ屋敷」と呼ばれていた（市教委一九六七）などから、チャシ（砦）というよりは屋敷跡の可能性も看過できない。擂鉢の出土は和人の存在を想起させ、千歳川や長都沼に接した立地は、交易にかかわる者が居住していた館跡の可能性も考えられる。

このほかに長都川に接して「都のチャシ」「長都のチャシ」がある。いずれも溝があることからチャシという名称が用いられているが、立地などの状況は釜加のチャシとよく類似している。

## 第四節　道具

### 第一項　丸木舟

丸木舟とは、一本の丸木の内部をくりぬいて造った舟であり、「独木舟」とも書く。アイヌ語では「チプ」と呼ばれる。国内で発見された最も古い丸木舟は、縄文時代前期（約六〇〇〇年前）のものがある。北海道では縄文時代中期末頃（約四〇〇〇年前）の丸木舟舳先部分などが、石狩市の石狩紅葉山49号遺跡から発見されている。北海道において丸木舟は、縄文時代から近代に至るまで使用されてきた河川や湖沼における主要な交通機関であり、漁撈や物資の運搬に不可欠な用具であった。千歳川では太平洋戦争直後までよく利用されていたという。

昭和四十五年七月、朝日町八丁目の市道で行われていた下水道のマンホール設置工事で、裏返しの状態で埋没している丸木舟が発見された。工事は中断され、舟はほぼ完全な状態で掘り出された。全長七㍍二八㌢、最大幅五八㌢、舷側内高二六㌢、舳先（へさき）と艫（とも）がとがった鰹節形の大型舟である。舷側端の厚さが二㌢、舟底の厚さ五㌢前後。舟底部は平らに削られ、断面形は箱型である。出土地点は、旧来のママチ川の流路附近と思われ、寛文七（一六六七）年に噴火した樽前山を噴出源とする樽前ｂ火山灰に覆われた川砂や粘土層の下から発見された。このことから、舟の制作年代は江戸時代初頭まで遡ることが確実である（市教委一九七九）。

昭和六十一年には、千歳川本流左岸の根志越橋下流から二つの舳先部分が見つかり、同年、清流一丁目に所在する千歳市水道局浄化センター裏手の千歳川河岸から、残存部の長さ六㍍六四㌢、幅六四㌢、舷側内高二五㌢、の丸木舟が発掘された。舳先や艫を欠損しているが、全長は朝日町で発見された舟より長いと推測できる大型舟であった（田村一九八四）。

朝日町や千歳川で発見された舟の特徴を述べると、次のとおりである。

（一）形状は舳先と艫がとがった鰹節形で、舟底は平坦、両端に向かってやや反り上がる。断面形は箱型。

（二）全長は七～八メートル、幅五五～六五センチの大型舟であるが、舷側内高は二五センチ前後であり低い。

（三）加工は丁重であり、舷側内面に工具による削り痕が認められる。

（四）材質はヤチダモ、カツラ、センノキ、いずれも千歳で自生している。

（五）舟端部の中位の高さに原木の芯が見え、原木の最大径が舟の最大幅となる木取りを行っている。

平成四（一九九二）年に実施された新千歳空港建設に伴う美々８遺跡低湿部の発掘では、丸木舟を土台に板を綴って舷側高を上げ、外洋でも使用された板綴舟の舷側板のほか、櫂やあか汲みなどの舟用具や漁撈具が多数出土した。それらは、江戸時代末の文政六（一八二三）年の『蝦夷生計図説』に描かれた舟や道具そのものであった。しかも、元文四（一七三九）年に噴出した樽前ａ火山灰と、寛文七（一六六七）年に噴出した樽前ｂ火山灰にはさまれた土層から出土しており、年代を示す指標の少ないアイヌ文化において、具体的な年代を特定できる資料を確認できた重要な調査であった（北埋調報一九九六）。

千歳市における丸木舟の記録は少ないが、安政四（一八五七）年四月、千歳を訪れた松浦武四郎の日誌には「千歳会所に着す。蔵多し、…其辺丸木舟多く繋是皆石狩通ひの舟也」と記され、丸木舟が当時の石狩と千歳を結ぶ主要な交通機関であったことが理解できる。千歳川会所の図には八艘の丸木舟が描かれている（松浦一八五七）。また、明治二十六（一八九三）年に記された北海道庁の殖民地選定に関する報文中の千歳原野の項で「原野西南ハ札幌、室蘭間国道ニ接シ、漁、千歳両川ニ丸木舟ヲ通スルヲ以テ水運モ亦梢便ナリ」とある（『殖民地撰定第三報文』）。

### 第二項　アイヌ文化期木製品

アイヌ文化期の出土遺物の中で、木製品、漆製品、繊維製品、皮革製品などは低湿地遺跡と呼ばれる水付きの状態や、焼失した住居内で炭化した状態など、特殊な条件のもとでないと残らないため、その発見はかなり限られたものになる。

千歳市域の低地部には数次にわたる火山灰の降下による水位の上昇とあいまって、美々８遺跡、オサツ２遺跡、ユカンボシＣ15遺跡、キウス５遺跡など良好な低湿地遺跡が多い。これらの遺跡で、樽前ａ火山灰と樽前ｂ火山灰の下層から、数多くの木製品、漆製品、繊維製品などが出土している。

江戸時代の後半に松前藩や本州から来た幕府の役人などによって記された旅行記や報告書、また、いわゆる「アイヌ絵」の中に民族誌的な記録が残され、当時の民具についてふれられている。これらの文献資料は一八世紀末から一九世紀代のものという制約があるので、遺跡から出土した遺物は、それ以前の様相を明らかにするための貴重な資料となる。

また、文献資料や伝世している民具をみると、アイヌ文化期には木・漆器・繊維・皮革・骨角などで作られた道具類が多く、鉄や銅製の金属器も木・皮などと組み合わされているものがほとんどである。つまり、通常のアイヌ期の遺跡を掘ってみつかる遺物は、生活用具のほんの一部であり、低湿地遺跡で有機質遺物が残ったときにアイヌ文化期の生活の様相がより明らかになるといえよう。

アイヌ文化期の遺物がまとまって出土している美々８遺跡を例にして、アイヌ民具と対比しながら金属製品と木製品などの出土品を機能と用途に

より分類すると次のようになる。

なお、傍線が木製品と漆製品。一部に骨角で作られたものも含まれる。傍線のないものにも木製のものが見られる場合がある。

〔建築〕柱、桁、梁、屋根材、高床倉用梯子、柵、杭

〔交通運搬具〕板綴り舟、丸木舟、早櫂、車櫂、あか汲み、背負い紐、編み袋、カンジキ、下駄

〔煮炊具・調理具〕鉄鍋、鍋鉤、自在鉤、串、包丁、まな板、杵、杓子、団子篦、摺鉢

〔食膳具〕皿、椀、箸、串、鉢、盆、曲げ物、折敷、陶磁器碗

〔貯蔵具〕漆器類、桶、片口容器、曲げ物、陶磁器壷甕類

〔木工具〕山刀、斧、楔、刀子、掛矢、木釘

〔狩猟具・武器〕刀、鐔、小柄、笄、槍、弓、矢、鏃、中柄、矢柄、矢筒

〔漁撈具〕銛先、ヤス、鮭鉤、鮭鉤台部、中柄、棹、指掛け部、魚たたき棒、タモ枠

〔農耕具〕鍬・鋤、鎌、箕、掘り棒、鉤鍬

〔編み・織り〕縄、紐、織具、編み物用軸木、糸締め具、こもづち　紡錘車

〔灯火具〕火きり板、火きり棒、火打石、火打金、松明台

〔祭祀具〕奉酒箸、木幣、花矢、棍棒、漆器

〔装身具〕竪櫛、横櫛、ガラス玉　シトキ　金属製玉

これらの木製品は、本州方面から移入されたものと地元で製作されたものに区分できる。前者には桶、樽、曲げ物、折敷、椀・皿などの漆製品が、後者には鮭鉤台部、銛の本体や中柄、奉酒箸（写真５－５）、杓子、篦、花矢などが含まれる。また、移入品の桶や樽の材は、加工がたやすいために箸や奉酒箸等として再加工した例も認められる。

木製品の中で、山刀（タシロ）・刀子（マキリ）の柄と鞘、杓子の柄、奉酒箸、制裁棒や舟の部品に文様がつけられたものがある。伝世品では刀子の柄や鞘、奉酒箸に様々な文様が付けられた物が多いが、出土品には簡単な刻みしか付けられないなどの差が見られる。なお、シロシ（祖印）については漆器の高台裏、花矢、奉酒箸などに付けられている。

出土した木製品のなかには丸木舟の舳先のように意図的に切断されたもの、中央で切断された弓、先端を折られた銛先の中柄など、使用後に切断されたり折られたりしたものが多くみられる。これらは「送り」の行為が行われたことを推測させる資料である。

製品によって使用される木の材質が異な

写真５－２　煮炊具、調理具、食膳具（美々８遺跡、北海道埋蔵文化財センター提供）

写真５－３　染付椀（美々８遺跡、北海道埋蔵文化財センター提供）

写真５－４　矢（美々８遺跡、北海道埋蔵文化財センター提供）

写真５－５　棒酒箸（美々８遺跡、北海道埋蔵文化財センター提供）

ることが民族調査で指摘されているが、出土品にも同様の傾向がみられる。たとえば、丸木舟はハリギリ属やカツラ属が多く、車櫂軸受部ではカエデ属、トネリコ属など緻密で硬い材質が用いられていること、回転式離頭銛中柄、指掛部、鮭鉤台部はアジサイ属（硬くてささくれのできにくいノリウツギと考えられる）が多いことなど、民族例と同様である。

ところが、発火具は桶や樽の再加工品と考えられるスギ属が多い。本州でも発火具として用いられている材であり、民族例にみるハルニレよりも多くなっている。本州からの移入品が多く、その材を使用できたことによるのであろうか。また、奉酒箸についても民族例ではヤナギ、ミズキを用いるとされているが、出土品はスギ属、ヒノキ属など道南または本州からの移入品が使用されていることが指摘できる。

### 第三項　金属製品

北海道では、続縄文時代以降鉄器が出土するようになると、石器が徐々に少なくなる現象がみられ、擦文文化期以降にはおもり、たたき石などを除き石器が無くなる。このことは刺す、切る、削る、たたき切るなどの機能を持つ道具が石器から鉄器に変わったことを示している。

また、縄文時代以来使用され続けてきた土器が消滅するのを指標として、擦文文化期とアイヌ文化期を区分している。土器の消滅は土器の煮炊きを行う機能が鉄鍋に置き換わったことを意味している。土器の主要な用途であった煮炊きの機能がなくなるとほぼ同時に、貯蔵や飲食具としての土器の機能も皮袋や木製品・漆製品へと置き換わったと考えられる。

鉄製品は日常生活を支える基本的な道具類となっていたものの、北海道内でほとんど製作が行われず、本州との交易による移入に頼らなければな

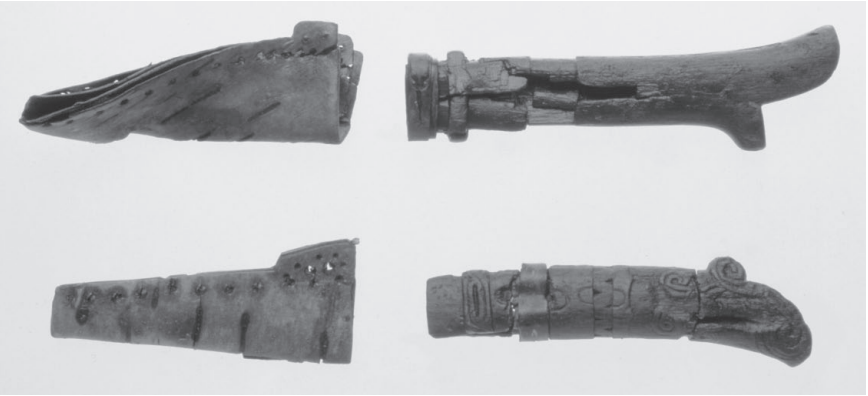

写真５－６　小刀（マキリ）樹皮製鞘と山刀（タシロ）柄　※右下に文様がつけられている。（美々８遺跡、北海道埋蔵文化財センター提供）

らなかった。それだけに貴重品として扱われたのであろう。

アイヌ文化期の遺跡から出土する鉄製品は、本州の中近世の遺跡と比べ量が多いことが指摘されている。たとえば、一六世紀代を主体とする上ノ国町勝山館跡から出土した鉄製品は、その種類と量が多いことが知られている。また鉄鍋は北海道だけで本州全体の出土量を凌駕している。このように鉄製品が多く残存したことについて、鉄の再利用（回収と鋳なおし等）が本州方面で行われていたが、北海道に及ばなかったために残ったとする説もある。

ただそれだけではなく、鉄製品の量の多さは、もの送りの習慣があったことや墓の副葬品として残された例が多いことにもよるのであろう。本州の墓には六道銭を除くとほとんど副葬品が無いのが一般であるのに対し、北海道では刀、山刀、刀子、鍋、銛先、中柄（写真５－４）、首飾り、漆器類などが副葬されている例が多い。このような墓の副葬品は近世になると男女による差が明らかになっており、金属製品では男性墓の刀、女性墓の鉄鍋が特徴的なものである。

刀は、本来は武器としての役割を持つものであるが、道内出土品では鎬（しのぎ）をもち、血抜きのある形態の整ったものは少なく、平打ちの単純な形態のものが多い。一方で刀装具が華やかになり、銀製や鹿角製の飾りが付いた鞘や柄が出土する。いわゆる「アイヌ刀」とよばれるものである。刃を研ぎ出していない鉄刀や木製の刀身がみられることから、武器としての刀より権威の象徴や儀礼用としての意味が重要になってきたと思われる。刀の佩（は）き方は、本州の打刀のように腰に差すのではなく、中世の太刀のように刀紐により吊り下げられる形態がとられている。出土する鍔（つば）も太刀鍔が多い。

鉄鍋は土器に代わり煮炊具として使用された。東北北部においては一〇世紀頃から鉄鍋片が出土するようになり、一一世紀には土師器の甕が消滅するので、鉄鍋が普及していたと考えられる。北海道においてはこれより幾分遅れるものの、道南では一二世紀中頃、道東・道北でも一二世紀末か一三世紀初頭までには土器から鉄鍋への転換が行われたと考えられる。中世段階では鉄鍋の耳が内側に付いたいわゆる「内耳鉄鍋」が主体で、一六世紀頃から吊耳鉄鍋が加わり、近世にはほとんど吊耳鉄鍋だけとなる。

鉄鍋は煮炊具であるから消耗も激しく、大量に北海道へ流入していたと推測され、アイヌ文化期の特徴的な鉄器にあげられる。中世には東北北部や新潟・富山・石川などから、近世には舟運の発達にともない日本海側と共に関西方面からも製品の流入があったと想定される。千歳市では昭和四十年に釜加遺跡で内耳鉄鍋が出土したほか、祝梅地区や千歳神社遺跡の出土品が古くから知られていた。昭和五十年代には末広遺跡や梅川４遺跡で女性の墓の副葬品として足元に置かれた例がみつかるなど、鉄鍋の発見例が多い。いずれも樽前ａ火山灰降下以前の時期である。

また、ウサクマイ遺跡群や末広遺跡などで墓にキセルや煙草入れが副葬される例がある。また、トメト川３遺跡１号平地住居跡から、キセルが火打石や火皿と思われる軽石製品と共に出土しており、唐津製擂鉢（一六世紀第４四半期）も出土している。渡島半島日本海側のせたな町瀬田内チャシ跡では一六四〇年降下の駒ヶ岳ｄ火山灰の上下から様々な形態のキセルが出土している。これらと江戸遺跡の編年と対比してみると一七世紀代に属するものが多くみられる。一七世紀代前半には喫煙の風習が北海道内に入っていたことがわかる資料となってい

写真５－７　キセル（雁首・ラウ・吸口）
（北海道埋蔵文化財センター提供）

写真５－８　キセル（吸口）（美々８遺跡、北海道埋蔵文化財センター提供）

る。

このような金属器の使用方法には、①本来の用途と変わらないもの、②形態はそのままであるが異なる用途に使用したもの、③形態を改変して異なる用途に使用したもの、④器具の一部を別の用途に使用したもの、⑤再加工して別の用途に使用したものなどがみられる。本州と比較して、②～⑤が多く見られるのが特徴である。

鉄鍋やキセルは①、刀は儀礼的要素が強く②となる。装身具には③④が多い。鏡や鐔は孔をあけるなど若干の加工をして、シトキとして使われている。また、釘隠し金具、提灯の提げ金具などが使用されたシトキの伝世品がある。衣装の飾りにはボタン、足袋のコハゼ、帯金具、銭などが使われている例もある。④の例として、銛先に薄い鉄板や銅製品の一部が切り取られて鏃として取り付けられているものがある。なお、⑤にあたる釘、小札などの再加工については、鍛冶の項で改めてふれてみたい。

銭は道南部の一部まで貨幣経済が浸透し通貨として機能していたものの、道央部・道東部・道北部では針入れの留具、煙草入れの緒締め、タマサイの飾り、服の装飾などとして使われている。②か③の例になる。

### 第四項　ガラス玉

本州の中近世の遺跡と比べ、アイヌ文化期の遺跡からはガラス玉が出土することが多い。特に墓からの出土例が多く、玉が数十個出土する場合は女性用のタマサイやシトキ、数点のものは煙草入れの緒締め、針入れの締め具など多彩な用途が推定される。民族誌の記載では女性墓にタマサイやシトキが副葬されるか、墓上で紐を切り、まかれることがあるとされている。

出土するガラス玉の形態は、丸玉、ミカン玉（筋玉）、棗玉（なつめだま）などがあり、その色には青、黒、紺、浅黄、緑、黄色、赤、白、透明などがある。大きさは、伝世品では直径四センチを超すような大型の玉がみられるが、出土品ではほとんどが直径二センチより小さく一センチ前後のものが多い。また、流水紋、小桜紋、瓜紋などの模様がみられるが、その割合は華やかな模様を持つものがある伝世品と比べるとわずかである（写真５－９）。

恵庭市カリンバ２遺跡第Ⅵ地点、余市町大川遺跡などでは、中世のアイヌ墓からガラス玉が出土している。中世の出土品は、本州でのガラス生産がほとんど知られていないので大陸からの流入品と考えてよいだろう。中国の山東半島博山では元代から明代にか

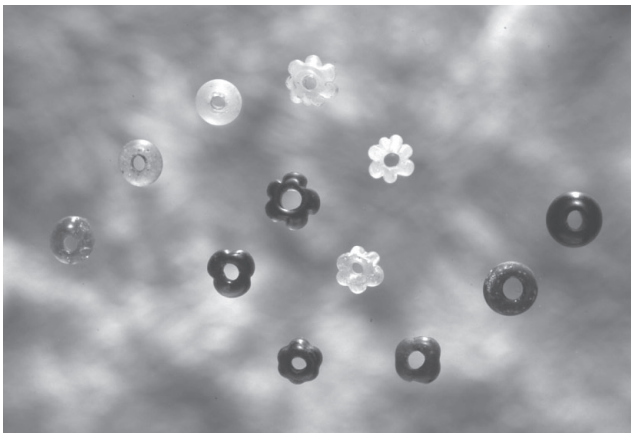

写真５－９　いろいろなガラス玉（美々８遺跡、北海道埋蔵文化財センター提供）

けての玉生産遺跡が発見されており、その周辺から中国東北部を通り、近世の山丹交易と同じルートをたどって北海道に到達するルートもあったのではなかろうか。このほかにもステップ地帯を西方から運ばれた玉がこれとともに流入した可能性がある。

一七世紀はじめ、宣教師ジェロニモ・デ・アンジェリスは松前付近のアイヌの女性が種々の色ガラスの玉を頸にかけていることを記している（H・チースリク編『北方探検記』）。

また、一八世紀からの本州の文献では、「青玉」、「虫の巣」などと呼ばれる玉が大陸から持ち込まれていたことが明らかにされている。幕末の函館奉行所関連文書にも山丹交易で玉が運ばれてきたことが記されているので、近世を通して大陸からガラス玉が流入していたことになる。

一方、一七世紀頃から長崎、堺、江戸などでガラス生産が行われるようになった。一八・一九世紀の文献には松前で「虫の巣」のまがい品が売られていることが記されており、近世後半には国内のガラス生産地で作られた玉が北海道へ運ばれていたことがわかる。現在、玉の成分分析が次々に行なわれており、玉の流通に関する新しい手がかりが得られることになろう。

## 第五節　アイヌ文化期の生業

### 第一項　鉄器の普及と多様化する生業

アイヌ文化期の生業は、狩猟と漁撈を主とし、それに若干の農耕が加わっている。その組み合わせは縄文時代からの伝統を受け継いでいたとされることがあるが、時代を追って生業の内容がかなり変化している。その要因として、様々な鉄製品の普及による生業の効率化があげられよう。また、鉄製品を主体にした本州の物品を獲得するための交易品生産が、時代を追って拡大されてきたことも一因と考えられる。

狩猟に関連する道具類では、鏃が石から鉄へ変化し鋭利さが増すと共に、骨製・竹製・木製の鏃・銛先、中柄等の作成においても、石器に代わる鉄製小刀（マキリ）の利用が格段の効率化をもたらした。ワナに用いる木の切り出しや加工にも、鉄斧、山刀や小刀は石器より効力を発揮したに違いない。遺跡からは骨しか出土しないが、熊、鹿、貂、海獣類などの毛皮獲得が盛んに行なわれたのであろう。

川や海での漁撈では鮭鉤、銛、ヤスなどに鉄が使用されるとともに、骨製や木製の銛先や中柄の製作にも鉄器が重要な役割を果たしていた。また、札幌市Ｋ４８３遺跡でヤナがみつかっており、使用する木材の切り出しに鉄斧は大きな威力を発揮したといえよう。捕獲されたサケ類は交易品として大量に本州に運び出されるようになった。

擦文文化期にほとんどみつかっていなかった貝塚が、アイヌ期になると道内海岸部に残される。太平洋海岸部では苫小牧市弁天貝塚、室蘭市絵鞆貝塚、伊達市有珠３遺跡、南有珠２遺跡など、日本海岸では小樽市桃内貝塚、余市町大川遺跡など、オホーツク海沿岸部では小清水町フレトイ貝塚、斜里町オンネベツ西側台地遺跡などである。

日本海側の貝塚からは、ヤスで突かれた痕の残るアワビの貝殻が、また太平洋やオホーツク海に面した貝塚からは同様の痕が残るホタテの貝殻がまとまってみつかることがある。これらの貝は干し貝に加工し交易品として利用されたもので、このような貝塚は自家消費のためだけでなく、交易品生産のために形成された可能性がある。特に、近世以降は知行主や場所請負人との関連も考慮に入れる必要がある。

また、貝塚からはクジラ・イルカ・アシカ・オットセイ・ラッコなどの海獣、サメ・メカジキ・サケ・ニシンなどの魚骨が出土しており、当時の狩猟・漁撈の対象を知ることができる。海獣類は油の採取、肉の利用はもちろんであるが、その毛皮は重要な交易品となった。このほか、サケ・マス・ニシンなどの魚類が交易品として用いられたと考えられる。

農耕の面では林を伐採しての畑の造成に鉄斧や山刀（タシロ）、耕作に鉄製の鍬や鋤などの使用が考えられ、農作の効率を高めたであろう。キウス５遺跡から樽前ａ火山灰に覆われた畑跡がみつかった。川沿いの平坦面を利用して、六ないし七面の畑が造られており、各面は四から一〇本の畝で構成されている。未調査部分にも広がり、全体で五〇〇平方メートル程度と推定される。これは道央の内陸部では最初の発見であるが、同様な畑跡は洞爺湖町高砂貝塚、伊達市ポンマ３遺跡ほか、道南部の八雲町、森町、七飯町の諸遺跡で検出されている。作られた作物は、美々８遺跡低湿部、ユカンボシＣ２遺跡などから検出されているアワ、キビ、ヒエ属などが考えられる。

北海道では狩猟・漁撈の対象となる獲物は大型で個体数が多いことが知られている。鉄器による生業活動の効率化が行われることによって、生活に必要な資源の獲得とともに交易品の生産がより容易になった。それをもとにした本州・道南との交易により、鉄製品、漆器類、衣類、酒、タバコ等を手に入れることができた。つまり、本州からの毛皮、海産物などの需要を背景として、それなりの均衡をとっていたのがアイヌ文化期の交易の様相であったと考えられる。

### 第二項　離頭銛

アイヌ文化期の漁撈具として発達したのが、海獣狩猟や大型魚類の漁撈

写真５－10　回転式離頭銛中柄・指掛部（美々８遺跡、北海道埋蔵文化財センター提供）

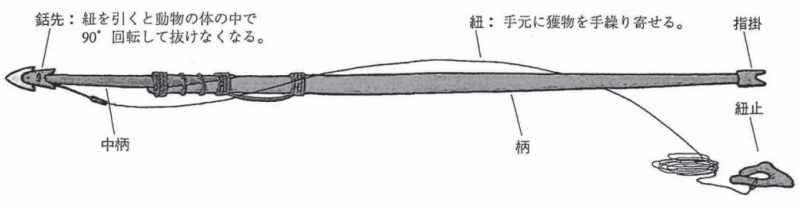


図５－４　回転式離頭銛（キテ）の構造（美々８遺跡、北海道埋蔵文化財センター提供）

に用いられた回転式離頭銛（キテ）である。銛頭は鹿角や海獣骨を素材として作られ、先端に金属製の鏃が取り付けられたものが多い。本体にはロープを通す二孔があり、基部に中柄と接続するための穴や溝が作られ、さらに獲物の体内から抜けにくくするための返しが作り出されている。ロープを通した銛先を中柄を取り付けた柄の先に装着し、棹の基部に指掛け部をつけて、投げつける構造となっている（図５－４）。銛が対象となる獲物に刺さると銛先が中柄から外れて獲物の体内に残り、ロープだけで獲物を手繰り寄せる仕組みである。このような離頭銛は縄文時代に出現し、続縄文時代とオホーツク文化期の技術を引き継いで発達してきたものである。アイヌ文化期には銛本体の穿孔、えぐりなどの細かい工作は鉄製小刀の利用により、より精巧なものになったと考えられる。

アイヌ文化期の離頭銛は道内各地から出土しており、また伝世品が道内に数多く残されている。千歳市では末広遺跡から銛頭二点がTa－ａ火山灰の下で、美々８遺跡から銛頭一点がTa－ｂ火山灰の下でみつかっている。また、美々８遺跡低湿部からは、銛頭はないが、一本式・二本式の銛頭中柄、棹、指掛け部が出土している。

アイヌの人々は、このような離頭銛をアシカ、アザラシ、オットセイ、ラッコなどの海獣類、サメ、メカジキ、マンボウなどの大型魚類の捕獲に用いていたことが知られている。アイヌ文化期においてもほぼ同様の対象が考えられよう。

美々８遺跡は太平洋側勇払の海岸線からウトナイト湖に入り一〇キロ以上美々川を遡った内陸部にあたる。この遺跡からはマグロ類の骨がわずかだが検出されており、後述するように丸木舟の早櫂水掻部と車櫂受台部にメカジキの線刻画が残されていた。メカジキは、ひだか町（旧門別町）の海岸砂丘に立地するシノタイ遺跡では吻端骨が立て並べられており、特別の送り行為が行われたことが知られている。銛本体に華麗な装飾を施す例が伝世品にみられることから、銛を利用した海獣狩猟や漁撈活動が社会の中で重要な役割を果たしていたことが想定される。

## 第三項　鍛　冶

鉄製品はほとんどが本州方面との交易によって手に入れなければならないものであったが、それを恒常的に入手することが可能であった。また、鉄製品の日常的な維持のために、再調整や簡単な加工を行うための鍛冶が行われていたことが最近の発掘調査によって明らかになっている。本州における「村の鍛冶屋」と同様の技術が北海道内でも存在していたのである。

擦文文化期には千歳市内のキウス９遺跡、キウス５遺跡、オサツ２遺跡、末広遺跡などのほか、全道各地で鍛冶の跡がみつかっている。またアイヌ文化期では平取町ピパウシ遺跡とイルエカシ遺跡で鍛冶炉の存在が確認できた。千歳市内のユカンボシＣ２遺跡、オルイカ２遺跡などのアイヌ文化期の集落跡からも、砥石、フイゴ羽口、金床石、鉄滓（てっさい）などが検出されており、鍛冶が行われていたと想定される。

アイヌ文化期の鍛冶炉の周辺から、和釘、船釘、カスガイ、小札などの小形の鉄器類、棒状鉄製品と呼ばれる鉄棒、鉄鍋の破片などが出土している。これらは再加工されて別の用途に使うためのものと考えられる。釘を曲げた釣針、舟釘を曲げた鮭鉤（マレック）、棒状の鉄製品を利用したヤスなどの出土例がある。千歳市梅川３遺跡のＩＰ－１からは小札が折り曲げられた状態で出土しており、何らかの補修か補強に使われたものと考えられる。鉄鍋では、千歳市末広遺跡のＩＰ－91からの出土品は、割れ口を銅板で補修した例、稚内市オンコロマナイ貝塚出土品は鉄の鋲で補修した例である。

このような金属加工の技術は、擦文文化期からアイヌ文化期へ連続していたかどうかについては、まだ明確な結論は出ていない。しかし、日常的に使用する鉄製品の導入と再加工技術は一体として導入されたと考えるのが自然であろう。

もう一つ注目されるのが棒状鉄製品や棒状鉄素材と呼ばれている断面角状で、長さ二〇チンほどの棒状の製品である。そのまま、ヤスやマレックに加工することもあったと思われるが、棒状のまま残存しているものは、特に使用痕が見られないことから鉄の素材として流通していたものであろう。

道南部の上之国勝山館跡では鍛冶炉や精錬炉跡と、半月形の鋼鉄塊、蛤形の銑鉄塊などが発見されている。道内では銑鉄を鋳造する遺構は見つかっていないので、銑鉄塊は鍛打により炭素量を減らし鋼とする精錬が行われた可能性がある。また、鋼塊はそのまま刀子など金属器の生産に使用されていたと考えられる。

『新羅之記録』によればコシャマインの戦いは志濃里の鍛冶屋で作られたマキリをめぐる争いに起因したとされている。志濃里に鍛冶屋がまとまっていたこと、そこでマキリの製作が行われていたことは鉄素材の流通と関係し、道南部でアイヌの人々との交易品の作成が行われていたと考えることができる。

なお、道央部の遺跡でも棒状鉄製品が出土することから、素材で持ち込み、製品の作成も行われていたのではないかと推測される。

ところで、アイヌへの鉄の輸出がきびしく制限されていたとの記録が古川古松軒『東遊雑記』（天明八〈一七八八〉年）にみられる。

土人物語に、日本のかたな・脇差も蝦夷人所持せることにて（中略）たから物のように思いおるよし。すべて鉄類は蝦夷地へ渡すことは松前侯よりの制度ありて、みだりに交易することならず、刃金の入りし切れものは、何によらずして厳しき法度なるに、前まえに渡せしことなるにや、または今にてもぬけて交易することにや、大工道具まで富饒なる夷人は所持せるとの風聞のよし。おもてむきは刃金の入らざるものばかりをわたすことなるに、夷人の手にて如何製することにや、小刀・鎌・斧・包丁に至るまでよく切れて、日本にて使う刃かね入りし切れ物に勝ると、松前にて各おのいうことなり

とあり、松前藩がアイヌとの交易を独占するための禁令があったことがわかる。しかし、蝦夷の刃物がよく切れるとの記載があり、加工技術も導入されていた可能性があることも述べている。金属製品の出土状況をみると多くの鉄製品が出回っており、たとえその交易が禁止されていたとしてもアイヌ社会での鉄製品利用においてほとんど実質的問題はなかったと考えられる。

## 第六節　美々８遺跡低湿地

### 第一項　美々８遺跡建物跡・「ヒヒ憩所船乗場」

美々８遺跡は、太平洋に注ぐ美々川の支流である美沢川の両岸に広がる美沢川流域遺跡群の一つで、台地上部の平坦面から河岸段丘斜面および河沿いの低地部に広がっている。アイヌ文化期の遺構と遺物は樽前ｂ火山灰下層のⅠ黒層、樽前ａ火山灰とにはさまれた０黒層、樽前ａ火山灰上層の表土層から検出されている。

台地上部からは、両火山灰に覆われた道跡とその周辺に掘立柱建物跡がみられ、珠洲系陶器、内耳鉄鍋・斧・刀子などの鉄製品、骨角器、漆器などがみつかっている。また、０黒層とⅠ黒層では、それぞれ斜面に三条ほどの道が検出された。このうち一条はⅠ黒層にあった道跡が樽前ｂ火山灰降下後も、ほぼ同じ位置につけられたものである。

写真５－11　美々８遺跡中・近世道路調査状況（白く見えるのが道跡『美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ』より）

これらの道を下った低地部のⅠ黒層と０黒層からは掘立柱建物跡、焼土、灰集積などの遺構と、金属器、陶磁器、漆器、骨角器、ガラス玉などが出土している。川岸は低湿地遺跡となっており、ここからは船着場の跡、家跡、送り場跡などとともに、先に紹介したような種々多様な木製品や繊維製品が出土しており、一七・一八世紀のアイヌ文化の様相を明らかにすることのできる良好な資料となっている。特に、舟の部品や櫂、それに船着場跡の発見は美沢川流域が「シコツ越え」と呼ばれた日本海と太平洋を結ぶ交通路上に位置していたことを物語っている。

表土層ではⅠ黒層と０黒層からみつかった遺構群のある沢より一つ下流部の涸れ沢部分から、四本×五本の柱穴で構成される建物跡がみつかっている。柱穴は平均直径一五センチ、深さ六〇センチ。建物規模は東西七・三メートル（約四間）、南北六・二メートル（約三間）ほどで、各辺の長さはわずかに異なっている。この建物跡の一〇メートルほど北側には三本の柱穴列が検出されており、掘立柱の建物の一部と考えられる。柱穴の径は一〇～一二センチである。

この建物跡周辺は急な段丘斜面が続き、わずかにこの建物跡があった部分だけが、緩やかな傾斜となっている。台地上からこの涸れ沢へ下る道跡が検出されており、荷車の轍跡も残されていた。この道跡は、幅七メートルほどで、川への下り口として利用されていたことがわかる（写真５－11）。

松浦武四郎は、弘化三（一八四六）年に舟で石狩湾からイサリ（恵庭市漁）にはいり、ヲサツ沼を経てチトセの番屋に入った。チトセの番屋からは陸路を通って、ヒヒ（美々）で乗船し勇払へ下っている。このときの記録である『再航蝦夷日誌　七』には、「ヒヒ憩所船乗場之図」があり、急崖のある川べりの場所に、船乗場に集まる舟、岸にある憩所ともう一軒の家が描かれている（図５－５）。また、ヒヒ（美々）について、

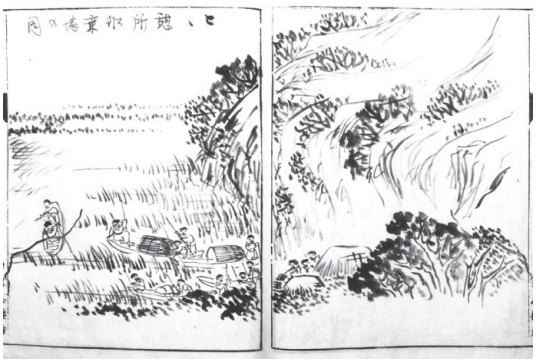

図５－５　ヒヒ憩所船乗場の図（『再航蝦夷日誌　七』松浦武四郎記念館所蔵）

「従チトセ番屋山道弐りといへとも近きやに覚ゆ此処小休所有　うらに夷人小や弐軒有此山中に而焼たる炭を皆此処へ出す　是よりして皆ユウフツニ送る也　又秋味も此処迄馬車にて積来り其より小舩にて送る　此処より上舩す」と、船乗場に憩場が設けられ、アイヌの家があったことを記している。

検出された建物跡のある周辺の地形がこの絵に似ていることから、美々８遺跡付近がヒヒ（美々）であり、この建物跡は憩所で、北側にある三本の柱穴列は、図に描かれたもう一軒の建物（夷家）の一部であったと推定される（写真５－12）。

また、武四郎は台地上からこの沢へと下る道についての記載も残している。武四郎は安政五（一八五八）年に小樽から札幌を通り、陸路千歳からビビを抜けて勇払へ出た。この時の記録である『西蝦夷日誌』五編に、「此の道は文化度、山田屋文右衛門なる者切開きしと云う街道なれば道幅も広く、秋過る頃はイザリ・ムイザリの鮭を牛馬車の三品にてビヾに下る道なり。ビヾよりユウブツ迄また小舟にて下げ舟に積、是則江戸にて黒毛と云鮭なり」と記している。この道に追分（右ビビ、左ヒポエカリ）標が立てられており、「右に下ればビベンコ（またベンケビビとも云う）、名義、冷水の上に涌出る儀。此処に四尋も深き水の壷あり（番やあり、チトセ荷物此処より小舟に積なり）。傍崖にて風景よろし。丙午（一八四六）の秋は余是より船にて下る」と記している。

写真５－12　美々８遺跡中・近世道路調査状況（白く見えるのが道路、北海道埋蔵文化財センター提供）

この下り道が発掘で見つかった道跡とみることができる。炭や鮭が運び出される拠点で、馬や荷車がここまで入っていたことなど、発掘の結果とよく整合している。なお、近年はヒポエカリから船積みすると付け加えている。ヒポエカリはビビ川の本流との分岐点で、今の御前水あたりと考えられる。

幕末の道路は、昭和期に千歳飛行場が建設されるまで引き継がれていた。旧国道36号は山田文右衛門の開削した道路と同じ場所を通って、千歳会所跡のあった市街地からまっすぐこの地点に伸びており、美々８遺跡に突き当たるところから美沢川に沿って東南にカーブしていた。この建物跡がみつかったのは、このカーブ地点の斜面下に当たる。

**シコツ越えと美々８遺跡**

松浦武四郎の記録から、幕末の美々８遺跡の状況と対比したが、さらにそれ以前の状況についてふれてみたい。

文化年間（一八〇四～一八一七）千歳会所と美々の間および千歳会所とイザリ間の新道を開削した山田文右衛門は幕府の東蝦夷地直轄期（寛政十一〈一七九九〉年）に設けられた勇払場所の請負人であった。勇払場所の範囲は千歳を越えてイザリフト、ムイサリまで含まれていた。勇払場所が千歳を越えて石狩川水系にまで広がっていたことが注目される。

また、それ以前のシコツ十六場所と呼ばれる時期にも太平洋側と千歳市域との関連があった。千歳地域は千歳川水系に含まれており、それを利用した日本海側との関係だけでなく、太平洋側との関連も深かったことが判る。日本海側と太平洋側を結ぶルートは一七世紀からシコツ越えとして知られ、正保元（一六四四）年に幕府が松前藩に提出させた『正保御国絵図』

に引かれた朱書きの線まで遡ることができる。

０黒層（一六六七～一七三九）とⅠ黒層（一六六七以前）からは本州方面から持ち運ばれてきた樽・桶・曲げ物などの木製品、漆器、鉄器、陶磁器、ガラス玉などが出土している。年代の明らかなものでは一四世紀後半から一五世紀前半にかけての中国製陶磁器、一五世紀中頃に能登半島で焼かれた珠洲系陶器の擂鉢がある。同時期の遺物は余市町大川遺跡で相当量出土しており、日本海航路で余市を経由して搬入されてきた可能性がある。さらに擦文文化期に遡れば、鉄器をはじめ、須恵器の坏・壷・甕なども流入している。早櫂など舟具の出土もあり、一七世紀以前にもこの付近が交通の要衝であったことがわかる。

**発掘された道跡**

市内の他の遺跡からも様々な道跡がみつかっている。特に、国道３３７号の改良工事に伴う発掘調査において、樽前ａ火山灰の下層（一七三九年以前）から、チプニー１遺跡、チプニー２遺跡、オルイカ２遺跡、アンカリトー７遺跡、祝梅川上田遺跡、祝梅川小野遺跡、梅川４遺跡などで次々と道跡がみつかった。道跡の周辺からはチセと考えられる掘立柱建物跡、倉跡、杭列、炉跡などの遺構が検出されており、カワシンジュガイの殻、鹿骨、骨角器、鉄鍋、刀子、古銭などが出土している。

松浦武四郎は、安政四（一八五七）年に石狩から江別に出、マオイトーから夕張に入り、再びマオイトーに戻り、その後、千歳へ抜けるルートをたどっている。その記録である『西蝦夷日記』五編中には、ヤムワッカヒラ、ユーナイ、ケネブチ、ウリウカ、キュウシ（キウス）、タンネエンルン、アンガリト（アンカリトー）、シュクハイ（祝梅）、ママツブト（ママチ）などの地名が見られる。これらの道跡遺構は、松浦武四郎のたどった道を一〇〇年以上遡るもので、オサツトー・マオイトーなどを含めた千歳川水系の右岸（東岸）を通るルートの一部だったと考えられる。

また、梅川４遺跡は美々川の上流にあたる千歳湖と近い位置にある。美々への山道が整備されていない時期には、シコツ越えの一部にあたっていた可能性もある。このほか、千歳川左岸（西岸）にも末広遺跡、トメト川３遺跡、オサツ２遺跡、ユカンボシＣ２遺跡、ユカンボシＣ15遺跡などでアイヌ期の集落跡がみつかっている。こちらは、イザリフトへ向けて整備された山道の前段階にあたるもので、千歳川水系の左岸をたどる道であったと考えられる。このような道跡の調査は集落における道と住居跡や倉などとの関連をとらえることができるとともに、集落間のつながりを明らかにする手がかりともなる。河川交通とともに、陸上交通網のもつ役割を再認識することができる。

**第二項　メカジキ線刻画のある櫂**

美々８遺跡低湿部の０黒層とⅠ黒層から出土した遺物のうち、木製品八五八点、漆器三八点、繊維製品一七点、金属製品一一九点、ガラス玉五点など一一六四点が平成十七（二〇〇五）年に重要文化財に指定された。その木製品の中に、メカジキの線刻画のある早櫂と車櫂受台部がある。

早櫂は、全長一九三・九㌢、柄部長一五八・四㌢、柄部径三・四㌢で、柄が三つに折れた状態で出土したが、完全な状態に復元できた。水かき部は長さ三五・五㌢、幅一四・一㌢、厚さ二・五㌢で、肩の張り出す幅広の形態で、断面は凸レンズ形である。水かき部の柄に近い場所に両面とも模様が描かれており、うち一面に魚の線刻画がある。線刻画の大きさは長さ二二・九㌢、幅六・八㌢で、吻が長く、背びれの基底が短く鎌形で、腹びれがないメカジキの特徴を表している（写真５－13下）。水かき部の先端は、尾びれの部分から欠損している。また、柄部の末端に近い部分には、

「X」字状のシロシが刻まれている。末端部は断面長方形でやや磨耗していることから、櫂握部が装着されていたと考えられる。木取りは柾目で、樹種はサクラ属である。柄部が長いことから外洋形ともなる板綴舟の櫂と考えられる。

車櫂受台部は舟の舷側板に縛りとめられ、車櫂を受ける軸木を持つ部分である。本例は現存長三四・六センチ、幅四・四センチ、厚さ二・八センチで、縛り付けるための両端の抉り及び軸受け部を欠損している。一側面に一一・四センチ、幅三・〇センチの大きさでメカジキの線刻画が描かれている。絵柄は早櫂に描かれたものと同一であるが、やや稚拙である。木取りは柾目で、樹種はハンノキである（写真5－13上）。

写真５－13　メカジキの線刻画のある早櫂水掻部と車櫂受台部（美々８遺跡、北海道埋蔵文化財センター提供）

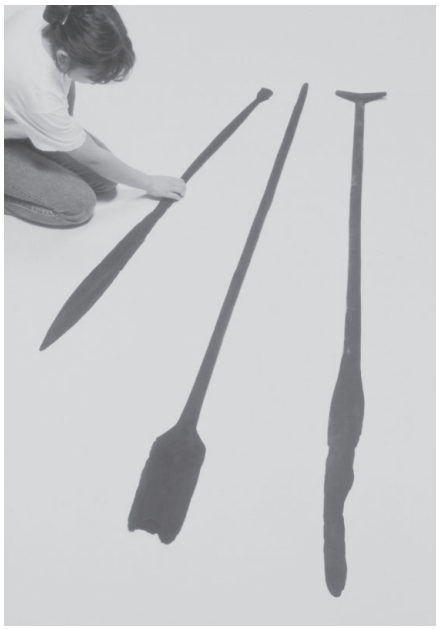

写真５－14　各種形態の櫂（中央が線刻画のある早櫂、北海道埋蔵文化財センター提供）

メカジキは、全長四メートル、体重三〇〇キロを超える大型魚で、七月から八月にかけて北海道の噴火湾から日高方面にかけて回遊してくる。アイヌの人々は、このメカジキをシリカプと呼び、板綴舟に乗り込み、五・六時間かけて沖合に漕ぎ出し、離頭銛を用いて漁を行った。白老の事例では三人乗り組みが多かった。射止めた獲物は、頭を切り取り、吻が上をむくように船に積み込んで帰った。村に帰ってからは解体が行われ、肉が食用として分配され、残ったものは細かく裂いて、蓬などを燃やして煙でいぶした後、炉の上で再度いぶして保存食とした。頭部は、カムイノミを行ってから解体され、吻は切り落とされた。

ひだか町（旧門別町）シノタイ遺跡では、長さ六メートル、幅四メートルほどの範囲にシカ、クジラ、イルカなどの骨とともに、メカジキの吻端骨と椎骨がまとまって出土した。吻端骨が先端から土中に突き刺さったままのものが八本あり、倒れたものを復元すると四〇個体以上が数列に立ち並んでいたことが判明した。メカジキを主体とする動物送りの場と考えられる。

美々８遺跡のメカジキの線刻画は、このような太平洋側におけるメカジキ漁と関連したものと考えられる。先にも述べたようにこの遺跡低湿部出土の木製品の中には、回転式離頭銛の一本用と二本用の銛先中柄、棹、指掛け部がみられる。板綴舟の破片も出土しているので、メカジキ漁に内陸部の人々も関与していたことを示すのではないだろうか。

美々８遺跡は勇払の海岸線からウトナイ湖に入り、一〇キロ以上美々川を遡った内陸部にあたる。このような内陸部の遺跡におけるメカジキの線刻画の存在は海岸部と内陸部が河川交通によって強く結び付けられていることを示している。このような河川集団は、イオルとよばれ、河川を単位として川を中心にした生活領域を共有形成し、共同して大型魚類や大型獣捕獲のための生産活動を行い、共同の祭祀を行っていたと考えられる。また、交易を行う際には舟の乗組員を輩出する集団となっていたのではないだろうか。

## 第七節　骨から見たアイヌ

立体的な顔面骨格、骨幹が扁平な四肢長骨、遠位部が相対的に長い上肢・下肢。これが縄文時代人の骨格の主要な特徴であるが、それをやや繊細にしたものがアイヌの骨格であり、骨格の上では縄文人とアイヌがよく似ていることは明治時代から知られていた（写真５－15）。「北海道人の系譜」の項で述べたように、現在では、日本列島の縄文人が北海道の続縄文人を経てアイヌに移行したと考えるのが定説となっている。本稿ではまず、擦文時代人骨から近世アイヌへの連続的な移行の詳細を述べ、次に北海道アイヌの地域差に言及し、オホーツク海沿岸部で起こったオホーツク人とアイヌの祖先の交流の可能性を考えてみることにする。

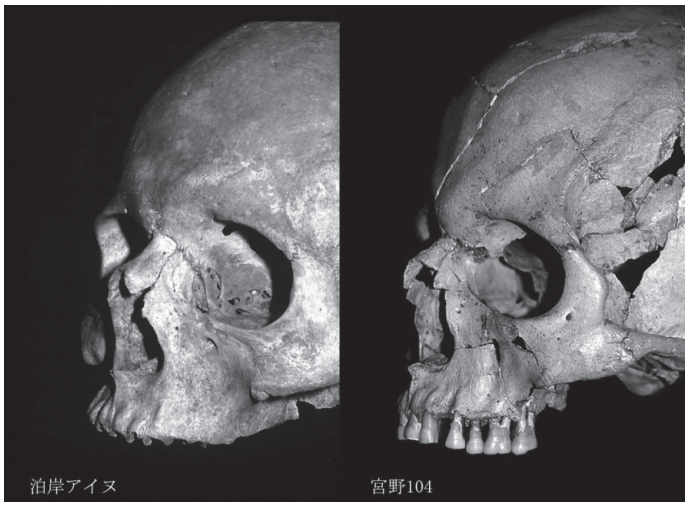


写真５－15　近世北海道アイヌ（左）と縄文人（右）の頭蓋の比較

**擦文時代人から近世アイヌへ**

最初に人類学的研究が行われた擦文時代人骨は、千歳市ウサクマイ遺跡Ａ地点出土のものである。昭和三十八年～四十一年に行われた発掘調査で、円形竪穴墓壙内に、金属器と続縄文時代終末期から擦文時代初期の土器を副葬されて、屈葬状態で埋葬された人骨が少なくとも九体分発見された。骨の保存状態は良好ではなかったが、国立科学博物館の山口敏等の報告によれば、頭蓋の非計測的形質の観察が可能で、近世アイヌとの親近性を示唆する特徴が少なからず確認されたという。

ほぼ同じ頃に大阪大学の調査団によって有珠善光寺遺跡から発掘された擦文時代人の頭蓋は、当初は和人的特徴が見られると言われていたが、百々等がより詳しく分析したところ、縄文人からアイヌへの移行形態を示していることが明らかになった。

現時点で最も保存状態のよい擦文時代人骨は、四十一年に厚岸町下田ノ沢遺跡で発見された成人女性人骨で、ほぼ全身の骨格が遺残している。百々等の人類学的研究では、この人骨は近世北海道アイヌと基本的に変わるところがないと結論された。問題は人骨の帰属時期であって、埋葬様式が屈葬で、墓壙中から擦文式土器の破片が発見されたので擦文時代とされていたが、最近骨の試料を用いてＡＭＳ法による炭素14年代測定を行った結果、この人骨がまぎれもなく擦文時代のものであることが判明した。

三十七年から四十二年にかけて行われた大阪大学による有珠善光寺遺跡の発掘調査では、室町・桃山期の有珠鉄器貝層人が三体発見された。これらの人骨を研究した栗栖浩二郎によれば、人骨の埋葬様式は東頭位、伸展葬で近世アイヌのそれと同じで、形態的にもアイヌと変わるところがないという。

以上述べたように北海道では、擦文時代から中世を経て近世アイヌ文化期まで、人骨の形態的特徴はスムーズにつながっていると考えてさしつかえない。

**地域差**

道東部と道南部でアイヌ頭蓋の計測値に若干の違いがあることは、北海道大学の伊藤昌一がすでに明らかにしていたが、昭和五十六年に山口敏は

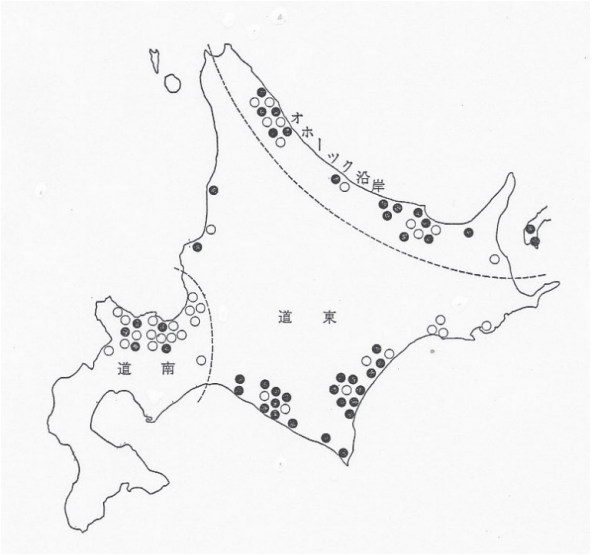


図５－６　アイヌ頭蓋のうち、判別関数において、平均よりアイヌらしさの強い個体（●）とアイヌらしさの弱い個体（○）の分布（山口敏1981）

アイヌの地域差をさらに詳しく調査した。判別分析法を用いて、アイヌ頭蓋の各個体を平均よりアイヌらしさの強いものと平均よりアイヌらしさの弱いものに分けて、北海道地図にプロットすると、アイヌ頭蓋は大まかに、道南地方、道東地方、オホーツク海沿岸部の三群に分かれることが明らかになった（図５－６）。

アイヌらしさの強い黒丸の個体は日高、十勝地方を中心にした道東地方に多く、アイヌらしさの弱い白丸の個体は道南地方に多い。オホーツク海沿岸では黒丸と白丸が相半ばしている。道東地方には縄文・続縄文時代から北海道固有の形態が残されていたことが知られているが、アイヌ期にいたってもその独自性が保たれていたものと思われる。一方道南部では、縄文時代以来本州との関わりが深く、本州からの遺伝的影響がアイヌらしさの弱い個体が多い原因になっているに違いない。そしてオホーツク海沿岸部ではオホーツク人の影響が白丸の個体の数を増やしているのであろう。これが山口敏の解釈であるが、オホーツク海沿岸地域のアイヌにオホーツク人の遺伝的影響が少なからず認められることは、最近オホーツク人骨の研究を勢力的に進めている琉球大学の石田肇や北里大学の埴原恒彦によっても確かめられている。

百々は石田・埴原とは別個に、札幌医科大学に保管されているオホーツク文化期の頭蓋の非計測的特徴を調査し、それを指標にしてオホーツク人とその周辺の人類集団の類縁図を描いてみた（図５－７）。この図によるとオホーツク集団は、縄文・アイヌ群と弥生人、古墳人、現代日本人、北中国人、モンゴル人といったいわゆる「典型的モンゴロイド」群のほぼ中間に位置している。オホーツク人は北海道アイヌの祖先集団に遺伝的影響を与えていただけでなく、逆に彼らからの影響も受けていたと解釈することができ、両者の交流は予想以上に活発だったのではないかと思われる。

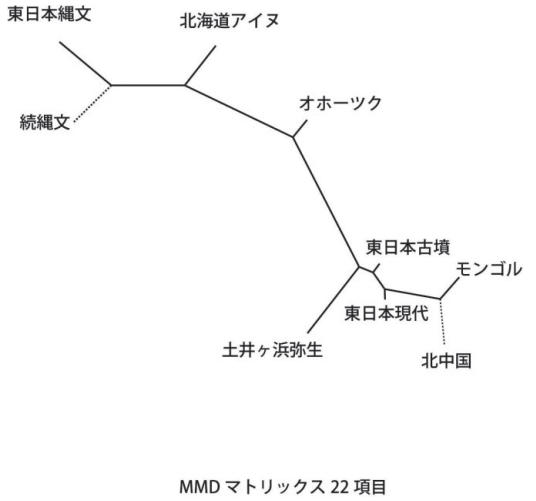


図５－７　頭蓋の非計測的形質22項目を指標にした近隣結合法によるオホーツク人と周辺集団の類縁図

**引用・参考文献**

ア・青野友哉「北海道における貝塚文化の消長－縄文時代～近代の生業と祭祀－」『地域と文化の考古学Ⅱ』明治大学文学部考古学研究室編　二〇〇八年／赤沼英男「中世社会における鉄器の製作とその使用－勝山館跡出土遺物からの発見」『北から見直す日本史』大和書房　二〇〇一年／秋田県教育委員会『寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡』一九八八年／安部辰夫・平川南『多賀城碑－その謎を解く（増補版）』一

九九九年／石附喜三男『北海道千歳市ウサクマイ遺跡』一九七四年／同「擦文土器の編年的研究」『北海道の研究』第二巻　清文堂　一九八四年／伊崎俊秋他『今川遺跡』津屋崎町文化財調査報告書第四集　一九八一年／石狩市教育委員会　『石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書』二〇〇五年／伊藤裕満　「白老地方におけるシリカプ漁の事例－伝統的海漁の集中調査の中間報告（上・下）」『アイヌ民族博物館だより』№11・12一九八六年／伊東信雄「土師器文化」『水沢市史』一九七四年／同「東北の弥生文化」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第一〇号　一九七九年／同「東北地方における稲作農耕の成立」『日本史の黎明』六興出版　一九八五年／宇田川洋『増補アイヌ考古学』二〇〇〇年／Ｈ・チースリク編『北方探検記』一九六二年／宇部則保「7・8世紀の沈線文土師器」『蝦夷・律令国家・日本海』一九九七年／同「香深井1遺跡の土師器について」『北海道考古学』45　二〇〇九年／梅原末治『鳥取県史蹟勝地調査報告　第一冊　鳥取県下に於ける有史以前の遺跡』鳥取県　一九二二年／枝幸町教育委員会『目梨泊遺跡』一九九四年／恵庭市教育委員会『恵庭遺跡』一九六六年／同『上島松遺跡』一九七四年／同『北海道恵庭市茂漁七遺跡・茂漁八遺跡』二〇〇四年／江別市教育委員会『萩ヶ岡遺跡』一九八二年／長見義三『ちとせ地名散歩』北海道新聞社　一九七六年／大谷敏三「擦文期の遺構・遺物について」『末広遺跡における考古学的調査（下）』千歳市教育委員会　一九八二年／大塚和義「アイヌのキテの諸系列」『国立民族学博物館研究報告』1－4　一九七六年「失われたアイヌの儀礼」『アニマ』№97　一九八一年／大沼忠春「続縄文文化」『北海道史研究』第一二号　一九七七年／同「北海道の古代社会と文化」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版　一九九六年ａ／同「擦文・オホーツク文化と北方社会」『月刊考古学ジャーナル№12　１９９６年ｂ／大場利夫『浜益遺跡』浜益村役場・浜益村教育委員会　一九六一年／大場利夫・石川徹『千歳遺跡』千歳市・千歳市教育委員会　一九六七年／大場利夫・大井晴男編『香深井遺跡下』一九八一年／小樽市教育委員会『蘭島遺跡Ｄ地点』一九九二年

**カ**・春日真実「越後出土の多孔底土器について」『新潟考古』第一四号　二〇〇三年／同「古代越後の集団と地域」『日本海域歴史大系』第二巻　清文堂出版　二〇〇六年／上ノ国町教育委員会『史跡上ノ国勝山館跡』ＸＸⅡ　二〇〇一年／萱野茂『アイヌの民具』一九七八年／北構保男『古代蝦夷の研究』雄山閣　一九九一年／Kidder "The Jomon Pottery of Japan" Artibus Asiae, Ason, Switzland 1957／喜田貞吉「本邦古代に於ける北地との海上交通」『交通文化』第五号　一九三九年／北沢実「展示品の紹介」『帯広百年記念館紀要』2号　一九八四年／京都国立博物館『京都国立博物館蔵品図版目録　考古編』一九九四年／金廷鶴編『韓国の考古学』一九七二年／釧路市教育委員会『釧路市材木町5遺跡調査報告書』一九八九年／久保智康「中世・近世の鏡」『日本の美術』第三九四号　至文堂　一九九九年／河野広道「網走市史先史時代編」『網走市（上）』一九五八年／同「胆振国千歳村火山灰下の竪穴住居跡」『人類学雑誌』第四七巻第五号　一九三二年／同「北海道の土器」『郷土の科学』第二三号　一九五九年／国立歴史民俗博物館『蝦夷の墓－森ケ沢遺跡調査概要』一九九四年／越田賢一郎「北方社会の物質文化　鉄からみた北海道の歴史」『蝦夷島と北方世界』日本の時代史19　二〇〇三年／同「アイヌ玉の話①②」『北海道の文化』51・79　一九八四・二〇〇七年／児島恭子「エミシ、エゾ、「毛人」「蝦夷」の意味」『律令制と古代社会』東京堂出版　一九八四年／後藤寿一「北海道の先史時代についての私見」『考古学雑誌』二四巻一一号　一九三四年／同「札幌市及びその付近の遺跡・遺物の二三について」『考古学雑誌』第二七巻第九号　一九三七年／小林孝二「アイヌ民族住居（チセ）に関する研究」『「北の文化交流史研究事業」研究報告』二〇〇〇年／小林行雄「さつもん－どき　擦文土器」『図解考古学辞典』東京創元社　一九五九年／駒井和愛「オホーツク式遺跡と大陸的文物」『歴史』第一巻第二号　一九四八年／同「日本石器時代と我が文明の起源」『日本古代と大陸文化』野村書店　一九四八年

**サ**・坂本太郎「日本書紀と蝦夷」『蝦夷』朝倉書店（一九六四『日本古代史の基礎

的研究　上　文献篇』東京大学出版会　所収）一九五六年／笹田友孝「金属器文化の普及」『北海道の古代３　擦文・アイヌ文化』北海道新聞社　二〇〇四年／札幌市教育委員会『H三七遺跡　丘珠空港内』一九九六年／札幌西高校郷土研究部「空知郡栗沢町由良における遺跡調査」『黒曜石』八号　一九五九年／佐藤孝雄「中・近世における北海道アイヌの狩猟と漁撈」『考古学ジャーナル』４　ニューサイエンス社　一九九七年／佐藤忠雄『奥尻島青苗遺跡（図版編）』函館土木現業所　奥尻町教育委員会　一九七九年／市教委『千歳遺跡』一九六七年／同『続千歳遺跡』一九七九年／同『ウサクマイ遺跡群の考古学的調査』一九七九年／同『末広遺跡』（下）　一九八二年／同『梅川４遺跡における考古学的調査』二〇〇二年／同『トメト川３遺跡における考古学的調査』二〇〇四年／標津町教育委員会『史跡標津遺跡群伊茶仁カリカリウス遺跡発掘調査報告』一九八二年／斜里町教育委員会『斜里町文化財調査報告書Ⅰ』一九八一年／関根達人「本州アイヌの狩猟と漁撈」『動物と中世　獲る・使う・食らう』高志書院　二〇〇九年

**タ**・田口尚「低湿地遺跡から出土したアイヌのガラス玉」『北太平洋の先住民族交易と工芸』二〇〇三年／同『アイヌ文化の木製品』『北海道の古代３　擦文・アイヌ文化』北海道新聞社　二〇〇四年／高橋正勝他『江別太遺跡』江別市教育委員会　一九七九年／高橋信雄「東北北部の土師器と古代北海道系土器の対比」『北奥古代文化』一三号　一九八二年／高橋学「口縁部に沈線文をもつ土師器」『蝦夷・律令国家・日本海』一九九七年／高橋與右衛門「岩手県内の北海道系土師器」同前／武末純一・石川日出志編『考古資料大観』第一巻　小学館　二〇〇三年／武田照雄「発足洞窟調査概ね法」『北海道の文化』特集号　一九六三年／田村俊之「千歳市根志越３遺跡調査概報」『北海道考古学』二〇　一九八四年／同「北海道における近世アイヌ文化の墓制」『中近世史研究と考古学』二〇〇二年／知里真志保『地名アイヌ語小辞典』一九五六年／坪井清足「ほっかいどう－せんし－どき　北海道先史土器」『図解考古学辞典』東京創元社　一九五九年／築館町教育委員会『伊治城跡』一九九二年／寺島良安「和漢三才図会」一七一二年／東京大学文化人類学研究室『オンコロマナイ』一九六七年／道埋文『ママチ遺跡』北埋調報九　一九八二年／同『美沢川流域の遺跡群９』北埋調報二四　一九八五年／同『美沢川流域の遺跡群』ⅩⅢ　北埋調報六二　一九八九年／同『美沢川流域の遺跡群』ⅩⅤ　北埋調報七七　一九九一年／同『美沢川流域の遺跡群』ⅩⅤⅠ　北埋調報八三　一九九二年／同『美沢川流域の遺跡群』ⅩⅤⅡ　北埋調報八九　一九九三年／同『美沢川流域の遺跡群』ⅩⅤⅢ　北埋調報一〇二　一九九五年／同『美沢川流域の遺跡群』ⅩⅩ　北埋調報一一三　一九九六年／同『千歳市キウス五遺跡（三）』北埋調報一一五　一九九六年／同『千歳市ウサクマイN遺跡』北埋調報一五六　二〇〇一年／同『千歳市チプニー一遺跡・チプニー二遺跡』北埋調報一七三　二〇〇一年／同『恵庭市西島松五遺跡』北埋調報一七八　二〇〇二年／同『ユカンボシC15』（４）　北埋調報一七六　二〇〇一年／同『チプニー２遺跡』（２）北埋調報二〇七　二〇〇四年／（財）北海道埋蔵文化財センター編『重要遺跡確認調査報告書第３集　奥尻町青苗砂丘遺跡２』二〇〇三年／常呂町教育委員会『常呂川河口遺跡（３）』二〇〇二年／『苫小牧市史』上巻　一九七五年／（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『下老子笹川遺跡発掘調査報告』二〇〇六年／鳥井龍蔵「古代の日本民族移住発展の経路」『新日本』第六巻十号

**ナ**・中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』一九九五年／中島直幸他『菜畑』唐津市文化財調査報告書五　一九八二年／中条町教育委員会『兵衛遺跡・四ツ持遺跡』一九九八年／名取武光「北海道の土器」『人類学・先史学講座』一九三九年／同『一九五三年度ブコッペ洞窟発掘概報・一九五三年の北海道考古学会』単B５謄写版／名取武光「千歳アイヌの祖印」『民族学研究』十三巻四号　一九四九年／名取武光・峰山巌「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』第十七号　一九六二年／七飯町教育委員会『桜町遺跡発掘調査報告書』二〇〇〇年／新潟県教育委員会『内越遺跡』一九八三年／日本考古学協会『日本農耕文化の生成』一九六一年

**ハ**・畠山三郎太「北海道の馬蹄状堅櫛について」『北海道考古学』２　一九六六年／浜田耕作・梅原末治『大正九年度古蹟調査報告　第一冊　金海貝塚発掘調査報告』朝鮮総督府　一九二三年／深沢百合子「エスノヒストリーとしてのアイヌ考古学」『北海道考古学』31　北海道考古学会　一九九五年／藤本英夫「北海道日高国新冠町大狩部の墳墓遺跡」『古代学』第九巻第三号　一九六一年／藤原弘明「五所川原産須恵器の編年と年代観」『五所川原産須恵器の年代と流通の実態』北日本須恵器生産・流通研究会　二〇〇七年／北海道帝国大学博物館・札幌犀川会「第一回北海道先史時代遺物展覧会陳列品目録」『蝦夷往来』第六号　尚古堂　一九三二年／北海道庁「殖民地撰定第三報文」『北海道庁第八回勧業年報』一八九三年

**マ**・巻町教育委員会『南赤坂遺跡』二〇〇二年／町田洋・新井房夫・森脇広「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』五一巻九号　一九八一年／松浦武四郎・秋葉実解説「丁巳第一六巻　由宇発利日誌」『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』下　一九八二年／松浦武四郎・秋葉実解説「丁巳第一六巻　由宇発利日誌」『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』下　一九八二年／松井恒幸「北のガラス史」のための覚書Ⅰ・Ⅱ－主として文献からみて－」『市立旭川郷土博物館研究報告』第一一号・一二号　一九七七・七八年／松居友『火の神の懐にて』一九九三年／MacCord Howard. A Cultural sequences in Hokkaido, Proceedings of the United States National Museum, No.3443　1960／松本彦七郎「北海道に類弥生式土器」『人類学雑誌』三十三巻八号　一九一八年／光井文行「7・8世紀にみられる沈線文をもつ土器について」『(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』Ⅶ　一九八七年／峰山巌「縄文式文化時代」『噴火湾沿岸の縄文文化遺跡』一九五二年／同「有珠善光寺遺跡　土器」『北海道の文化』特集号　一九六三年／村田晃一「陸奥中部にみる北との交流」『蝦夷・律令国家・日本海』一九九七年／桃崎祐輔「中世の棒状鉄素材に関する基礎的研究」『七隅史学』10　二〇〇八年

**ヤ**・八木奘三郎『日本考古学』嵩山房　一九〇二年／家根祥多「遠賀川式土器の成立をめぐって」『論苑考古学』天山舎　一九九三年／山崎純男他『板付遺跡調査概報』一九七九年／山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』一九八〇年／山内清男『日本遠古之文化』　先史考古学会　一九三九年／同「縄文時代研究の現段階」『日本と世界の歴史』第一巻　学習研究社　一九六九年／余市町教育委員会『天内山』一九七一年

**ワ**・和田清「唐代の東北アジア諸国」『東方学』第八輯　東方学会（一九五五　『東亜史研究（満州篇）』東洋文庫　所収）　一九五四年／稚内市教育委員会『稚内・宗谷の遺跡』一九六四年

## 本州・北海道比較年表

| | 本州 | | | 北海道 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 20,000 | 旧石器時代 | 後期 | ・ナイフ形石器が作られる<br>・槍の使用が始まる<br>・石刃、細石刃が作られる | 旧石器時代 | 後期 | ・人が住み始める（祝梅三角山遺跡）<br>・石刃、細石刃が作られる<br>・槍の使用が始まる<br>・細石刃文化が広がる |
| 10,000 | 縄文時代 | 草創期 | ・土器の使用が始まる<br>・竪穴住居が造られ始める<br>・弓矢の使用が始まる<br>・磨製石器の使用が始まる | | | |
| 8,000 | | | | | | |
| 6,000 | | 早期 | ・定住化が始まる<br>・釣針、銛の使用が始まる<br>・土偶の出現<br>・狩猟用落し穴が造られる | | | ・土器の使用が始まる<br>・弓矢の使用が始まる |
| 5,000 | | | | 縄文時代 | 早期 | ・竪穴住居が造られる<br>・土器に貝殻文が付けられる<br>・石刃鏃、擦切石斧の出現<br>・銛、釣針の使用が始まる<br>・小規模な貝塚が形成される<br>・土器に縄目がつけられる |
| 4,000 | | 前期 | ・大規模な貝塚が形成される<br>・丸木舟が作られる<br>・編物、カゴの製作、漆の利用<br>・大集落の形成（三内丸山遺跡） | | 前期 | ・縄文海進・貝塚が形成される（美々貝塚）<br>・けつ状耳飾りの出現<br>・円筒形の土器が広がる（キウス5遺跡）<br>・住居や集落が大型化する（大船Ｃ遺跡） |
| 3,000 | | 中期 | ・土器の意匠が発達する<br>・精神文化の発達<br>・貝塚が多くなる | | 中期 | ・気候の寒冷化が進む<br>・シカの追い込み猟（キウス5遺跡） |
| 2,000 | | 後期 | ・大規模な環状列石が造られる（大湯遺跡） | | 後期 | ・環状列石が築かれる（鷲の木5遺跡）<br>・周堤墓が築かれる（キウス周堤墓群） |
| 1,000 | | 晩期 | ・土偶が多く作られる<br>・亀ヶ岡文化 | | 晩期 | ・亀ヶ岡文化が伝わる（美々4遺跡）<br>・動物形土製品（美々4遺跡） |
| B.C.<br>A.D. | 弥生時代 | 前期 | ・稲作の開始、金属の使用<br>・倭の奴国王、金印受領 | 続縄文時代 | オホーツク文化期 | ・わずかな鉄器が伝わる<br>・石器と金属器を併用 |
| 100 | | 中期 | ・東北北部で水田稲作農耕が行われる | | | |
| 200 | | 後期 | ・高地性集落が造られる | | | ・余市町フゴッペ洞窟 |
| 300 | 古墳時代 | | ・239　邪馬台国の女王卑弥呼、魏に遣使<br>・大和朝廷の統一進む<br>・巨大古墳が造成される | | | |
| 400 | | | | | | ・東北地方に後北式土器が伝わる（4～5世紀）<br>・土師器文化の伝播<br>・オホーツク文化人渡来 |
| 500 | | | ・仏教伝来 | | | |
| 600 | 飛鳥時代 | | ・645　大化改新<br>・658～阿倍比羅夫北征 | 擦文文化期 | | ・660　阿倍臣、蝦夷・粛慎を討つ<br>・住居にカマドが造られる（丸子山遺跡）<br>・雑穀栽培が行われる（甑）<br>・機織技術の普及<br>・終末期古墳が石狩低地帯に出現<br>・金属器の加工が行われる<br>・本州との交易が盛んになる<br>・擦文文化北部～東部に拡がる<br>・青森県五所川原産須恵器流入（10～11世紀） |
| 700 | | | ・出羽国に出羽柵が置かれる | | | |
| 800 | 奈良時代 | | ・780　伊治公呰麻呂の乱<br>・801　坂上田村麻呂、蝦夷征討 | | | |
| 900 | 平安時代 | | ・935～41　天慶の乱 | | | |
| 1,000 | | | ・1051～62　前九年の役 | | | |
| 1,100 | | | ・1083～87　後三年の役<br>・1099　藤原清衡、平泉に居館を移す | | | |
| 1,200 | 鎌倉時代 | | ・源頼朝、奥州藤原氏を滅ぼす<br>・安東氏蝦夷管領となる | | | ・1264　元、樺太の骨嵬の征討作戦 |
| 1,300 | | | ・1322　安東の乱（奥州騒乱） | アイヌ文化期 | | ・土器が消え、漆器、鉄鍋が普及<br>・平地式住居に変わる<br>・チャシが築かれる<br>・道南12館（志・苫館・花沢館など）<br>・1456～7　コシャマインの戦い<br>・1604　松前慶広、家康から黒印状を受ける（商場交易）<br>・1669　シャクシャインの戦い<br>・18世紀初め　場所請負制度<br>・1805　「シコツ」を「千歳」に改名 |
| 1,400 | 南北朝時代 | | | | | |
| 1,500 | 室町時代 | | ・1356　諏訪大明神絵詞なる | | | |
| 1,600 | 戦国時代 | | | | | |
| 1,700 | 江戸時代 | | ・徳川家康、征夷大将軍となる | | | |
| 1,800 | | | | | | |
| 1,900 | | | | | | |

本表は、北海道開拓記念館発行の『自然の恵みをもとめた古代人―貝塚からみた北の文化―』文化年表を転載したものである（一部加筆）。